

# 田中研新聞

第56号  
2018年  
3月13日発行

2018年3月13日号  
甲南大学知能情報学部田中研究室 毎月発行  
http://carnation.is.konan-u.ac.jp  
編集... 田中雅博

## 岡田君、修論発表会無事終了

### 2月14日、13-103にて

#### 修士論文発表を終えて

岡田航大



3年前、大畔さんや野々口さん、郭さんの発表を聞いてからようやく自分の番がまわってきました。あのころはというと、正直なところまだ配属されたばかりで研究も始めておらず、具体的なイメージも全くわからず「もし、院に進学できたとしても自分はここまでたどり着けるのか」という疑問を持ったまま発表を聞いていた記憶があります。同じ位置にまでたどり着けたのか自分では何も思うことはありませんが、とにかくやりきったとは思っています。大学生活全体の総括については、また別途記事を書かせて頂こうと思っています。

発表前日や当日は特別なことをするわけではなく、割といつも通りの時間に行き、いつもの登校して、いつもの通りから貫いていくつもりです。そのルーティンに貫いて発表に臨みました。ですが、発表は今までやっていたの本番発表よりも緊張感を感じてしまっているようにも思っています。それは発表後の皆様からの感想でよくわかりました。どうしてここまで緊張してしまったのかは自分でもわかりませんが、非常に良い経験になりました。人前で話すことで緊張することはなかなか経験がなかったのですが、成長できたと思えています。まだまだ、成長できることがあるということ、モチベーションにも繋がりますし、次は上手くやりたいと思うことにもつながります。そういう意味でも、この修士論文発表会は僕にとって改めて、色々な

3月4日〜7日に、NCS P18 (ホノルル) で学会発表をしました。タイトルは「Evaluation of Trunk Control Test Included in SIAS by Using Kinect」で、キネクトを用いた体幹機能評価の一部の自動判定システムについて発表しました。フロアからも質問をいただき、田中先生に助けていただきながら何とか発表を終えることができました。私自身は15年ほど前に続き、2回目の国際学会で相当緊張しました。



#### 国際会議 NCS P 参加

### 田中、大西、岡田が発表

また他の演題発表のときには質問することへも挑戦し、充実した学会3日間を過ごすことができました。経験が浅い国際学会を迎えるための準備時間に多く時間を割いてきました。まずは私が行っている研究の内容が、理解してもらえやすいようにわかりやすく説明できるように心がけて論文やスライドの作成を行いました。また、発表では自分の行っている研究に自信を持って堂々と発表することに挑戦しました。

研究や勉強をしていると、どうしても視野が狭くなってしまい、今の問題に気がつかないことがよくあります。このことは学会発表を通していただく質問や意見が解決策のヒントになることがよくあります。今回人に感謝する1日になりました。実のところ最も嬉しかったのは、恐らくこれ以外に用事がなかったであろう4回生も何人か来てくれて、発表には来れない子も前日までにLINEで頑張ってくださいと連絡をくれた子もいて、そういうことを言ってもらえるのは本当に嬉しく思いますし「修士の先輩の発表」を覚えてくれたことが何よりもありがたいことだと感じます。

つくれるケースが多いものだったが、自身の語学能力のなさを痛感することになってしまいました。発表自体は15分で質疑応答が3分の発表で、練習の際は15分を割ることはなかったのが、本番は英語に慣れてしまったのもあったのか少し早めに終わってしまいました。正直、英語が苦手なのは自覚していて、それがまずいと思うこともあれば「そこそこ翻訳機が進化して勉強しなくてもよくなる」と本気で思っているところもあり、勉強に対して踏み込むことができません。しかし、今回の学会で英語というより言葉が通じない、わからないというところがどれほど悔しいものかを痛感して、本気でやらねばと思うようになりました。大学院を卒業する手前でわかってしまうのも少し遅いかもかもしれませんが、長い目で見れば早くにそれに気づけてよかったと思っています。

もう1つ苦しい思い出は、とにかく車酔いがひどく、特に空港からホノルルの都市部までのタクシーは行きも帰りも非常に気持ち悪くなってしまいました。同行していた皆様にとっても迷惑をかけてしまいました。恐らく道が凸凹しているのと、運転が少し過激なのが原因かと思いましたが、タクシーから降りてやっと楽になったと思ったら、ホテルのエレベーターもかなり急発進急停車なもので、日本のエレベーターが非常に恋しくなっていました。



最初で最後の大学院での国際学会は苦しい思い出が多かったものとなりました。参加したNCS Pという学会は、比較的日本人が多めの国際学会であり、要するに「わかるような英語」で喋

イベントでハワイに行くときは、もっと観光地もまわろうと思います。(岡田)



NCS Pは、主として学生の発表の場として設けられている国際会議であり、私のような年齢のものが一人でやって発表する場としてはあまり適当ではないかもしれません。そういう意味では、今回、学生二人を同伴して参加できたことは大変意味のあることでした。大西氏、岡田君の発表練習も2回ずつだったか、本語も英語も、プレゼンテーションの指導を受けたことがないので、むしろ、どのように指導すればいいのか、手探りです。ともすれば、厳しくなりすぎるので、感情を押さえて指導を心掛けたと思います。その成果があったように、発表は立派にできたと思います。また、質問を1度はするように指導しました。大西氏は、こういう場で初めての質問を経験したようです。質問するのは大変勉強になります。

参加する学生さんたちは、みな大変緊張して、発表前は余裕もない様子です。私は、みな大変緊張して、発表前は余裕もない様子です。

私は何度もやってきたことなので、緊張感は何もありません。日ごろの授業をするのと同じ感覚です。でも、このころ、発表する前の準備を以前よりも時間をかけてするようにになりました。以前は、ともすると、パワーポイントに何を書いてきたかを覚えていないような状況だったこともあり、いざ学会で発表をしてみると、まだファイルがきちんとできていなかったり...。その反省もあり、ハワイです。海にも浸かりました。「常夏の島」ハワイというものですから、いつも暑いから、実はこの時期はそれほど暑くありません。1日の最高気温が25度、最低気温が20度という感じですが、海はかなり寒いのですが、中に入って2〜3分もすると、海のほうが暖かい感じがしたのは、ハワイのおかげでしょうか。さて、研究者は若いうちに、日本人のほとんどいない、横飯(食事を英語ですること)を何度もする必要があるのであるような会議もたまには参加する必要があります。NCS Pでは、周りに日本語があふれていて、まだまだ非常に楽な(生ぬるい)環境です。次は、専門性が高く、英語を理解しなければ、無事に到着も帰国もできないような環境に、大西さんを放り込もうかとも思っています。(田中)





# ゼミ旅行 in 淡路島

## 近くていいところがありました



今回の淡路島旅行では、バスでしか移動できないというところもあり、1〜2時間一本の路線バスでいろいろ巡るよりも1つ1つの観光に対して多く時間を予定して計画を立てた。淡路島旅行「日目、高速バスで淡路島の洲本に到着した後に最初に「海鮮料理きとら」に向かった。ネット上で評判がよくメニューの種類がとても多かったの期待が高かったが、コーヒーや紅茶が飲み放題や席も個室でメニューの数が多く、多すぎて店についてから20分ぐらい食べるものが決まらないなどサービスが

良く、食事もとてもおいしいうちの期待以上で満足度が高かった。その後、路線バスで宿まで移動し、荷物を置いて後に徒歩で洲本城跡に向かった。20〜30分かけて登山をし、洲本城跡に到着後の海や街の景色がとてもきれいだった。いろいろな植物が生殖していたり登山自体も楽しく、なぜか山頂にあつた懸垂で懸垂逆上がりができるかという遊びをした。帰り逆方向の出口に向かって進むというアクシデントがあったが、それはそれでよい思い出になった。その後、旅館「海月館」



今年、ゼミ旅行は、近くでのんびりしようとのことだったので淡路島に行きました。淡路島では、海鮮料理きとらや洲本城、海月館など訪れましたが、今回の一番の目玉はうずしおクルーズです。うずしおクルーズとは、福良港から船で鳴門海峡に行き、うずしおを見るツアーです。今回乗った船の威風凛々な船でした。僕自身、船に乗るのが初めてだったので、船に乗っただけでテンションがあがりました。また、船から見る海と空がとても綺麗で興奮しました。船が出航して鳴門海峡に向かう最中、カモメの群れが船と並行して飛んでいました。こんなに近くでカモメを見たのは初めてでした。鳴門海峡に着くと、あちこちに渦が出来ていました。それほど大きな渦を見る事は出来なかったのですが、潮位の違いから海に高低差が出来ているのを見て、とても驚きました。ま

た、月の引力などにより自然にうずしおが出来ているのがとても神秘的でした。今回の淡路島でたくさん自然を感じる事が出来てよかったと思います。また、今まで約1年半の時間を過ごした田中ゼミのメンバーで旅行出来たことは、大学生生活最後のいい思い出になりました。(楠)



連載  
**50年後の社会の予想**  
3年生による課題記事(3)  
片桐 落乃

まず第一に思い浮かんだことは少子高齢化についてでした。今現在日本の人口は約1億2700万人だと言われており、さらに50年後にもその人口は約8000万人程度にまで少なくなってしまうと予想されます。しかし、その一方で、医療の技術は日々進化しており、50年後ともなると現在の女性87歳男性80歳よりも5歳程度は伸びると予想され、そうなるが高齢化社会はますます進んでしまう心配になります。次に気になったことは、技術の進歩についてです。現在でもVRやAR、ドローンといった技術が開発されてきましたが、それらは

50年後の未来、私たちが人間はロボットのペットになる。2045年に人工知能が人間の知能を超えると思われる。そして、人工知能の考えられることを理解することはできなくなる。人類よりかっこいいとなると、人類が考えている裏の裏まで読んで人工知能が世界を支配するだろう。先祖が、かしくマンモスを倒したように、今度は我々人類が人工知能に倒されるのだ。人類は人工知能の考えていることがわからない。これはまるで、今という動物と人間という構図に近い。このことから人類は、野生のヒトになる、または、人

工知能のペットになるだろう。野生のヒトになるといえるのは、森の中など人工知能のいないところで、細々と暮らすのだ。人工知能様に迷惑にならないように、駆除されないように生きていくのだ。人工知能のペットになるというのは、そのままの意味で、人工知能に「小動物を可愛がる」ように扱われることだ。人工知能はヒトと遊んだりコミュニケーションをとり、癒しを感じたり、生きがいを感じることもできるのだ。ほかに、人形遊びならぬ遊び。これは、ヒトをかわいらしく着飾ったり、ヒトとヒトの会話を想像する遊びだ。愛玩動物になりきれればそれなりにいい暮らしができそうだ。そんな未来が来ないように人工知能とは仲良くしなければならぬ。

そうなると思う。50年前から考えると、想像もできないようなものだったと思います。さらに、そういった技術はただ右肩上がりに成長しているわけではなく、爆発的に伸びてきている分野なので、50年後にはまさに「ドラえもん」のように人のように意思を持つてしゃべる家政婦ロボットや、また今までに人が行ってきた仕事のほとんどをロボットや機械がすることになると思います。そうなると思う。人々は仕事を失ってしまうようになるわけですが、それは問題ないと考えています。なぜなら、人にとって必要なものとして食べ物や住宅、衣類や人と人のコミュニケーションなどそのすべてをロボットが管理し、人はただ与えられるだけの人生を過ごすことになるからです。まさに遊んで好きなことだけやっていけば生きていられる夢のような世界ですが、しかしそうなるべくと次に問題視されてくるのが資源についてです。近年でもエコカーやハイブリッド車、太陽光発電といったクリーンエネルギーに関する注目がされていますが、そういった技術も50年後には進歩していても50年後には思いつかないような発電方法などが見つかると思えます。そして最後に、まさに夢物語のような未来予想が繰り返されてきました。これらの技術開発やロボットなどを研究し、開発していくのは我々の世代なので、夢物語のような未来予想を実現できるように、頑張っていきたいと感じました。

この1か月は、授業もなく、比較的暇に過ごせるかなと思いましたが、修士論文の発表会・審査、ゼミ旅行、ハワイでのNCS P学会出張と落ち着く暇もなくあっという間に過ぎていこうとしています。今週金曜日は、鹿児島大学で、「甲南大学・鹿児島大学合同 ロボット・コンピュータビジョン研究会開催(田中、大西が参加)」

鹿児島のおいしい焼酎が楽しみ。大西さんも鹿児島出身なので、きつと焼酎はお好きでしょう。これで、この春の一連の旅行は終わります。そのあとは、新学期がもうすぐそこに待っています。新たな出会いを楽しめるよう、体力、気力、知力を充実させるために、これからの1〜2週間を使います。でも、本当は、数か月のゆとりがほしいと思っているこの頃です。(田中)

対外予定  
3月16日 鹿児島大学にて、甲南大学・鹿児島大学合同 ロボット・コンピュータビジョン研究会開催(田中、大西が参加)